

「グスコープドリの伝記」を読む

—主人公の死をどう理解するか—

中 野 新 治

に見出さないではいけない」(栗原敦)であろう。^③

それは単にブドリが農業に従事していたり、科学技術者になったりすることや、冷害に襲われるイーハトーブが作者の現実^①に極めて近いというだけではない。たとえばブドリの結婚について考えてみよう。さらわれて行方不明であった妹ネリは兄との再会を果したあとと幸せな結婚をし、子供も生まれるのに、ブドリはなぜか結婚のそぶりさえみせない。みつかった両親の墓も立派なものに建て直し、心に何のわだかまりもなく火山局の技師として「ほんとうに楽しい」五年間を送ったのだから、ブドリもまた結婚を考えても何の不思議もないのだが、物語は右の出来事を語ったあと、急転直下、冷害から死へのブドリの道ゆきを語るのである。この主人公の結婚への無関心、あるいは拒否は、作者の次のような決意と呼応していると言うことができる。

私は一人一人について特別な愛といふやうなものを持ちませんし持ちたくもありません。さふいふ愛を持つものは結局じぶんの子どもだけが大切といふあたり前のことになりますから。

(昭和四年日付不明 高瀬露あて書簡下書 傍点引用者)

「グスコープドリの伝記」は数少ない生前発表作品として、昭和七年三月「児童文学」第二冊に発表された。作者の死の一年六ヶ月前である。主人公が二十七歳で犠牲的な死をとげることになっていても、実際に物語の展開に従って計算すると二十九歳であったり、第九章がぬけたまま「十、カルボナード島」で終つたりしているところに、病床での作者の痛々しい推敲の姿を見ることもできるのであり、自由奔放なバケモノ世界を舞台とした「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」(大9?)から生真面目な「グスコンブドリの伝記」(昭6)へ改稿され、さらに現在の形をとったこの作品が賢治最晩期の深い思いを荷っていることを疑うことはできない。それゆえこの作品は「ありうべかりし賢治の自伝」と呼ばれて来た。小沢俊郎氏の言うように「ブドリの状況に賢治が立てばブドリのようにしたろうという意味であり、賢治がブドリに近い生涯を送ったというのではない」ことは明らかであるが、やはり一方で「私たち^②は、作者の美人生上の体験と作中事実との深い呼応関係をこの作品

「グスコープドリの伝記」を読む —主人公の死をどう理解するか—

自分へ好意を寄せて来た女性への断わりの手紙である。ここで賢治は相手を傷つけないために自分が独身主義者であると弁明しているのではない。もつと強く、自分は「あたり前の人間」ではないから近づくな、と言っているのである。賢治はなぜ「あたり前のこと」を拒否するようになったかをここで語ってはいない。それは女性だけではなく、父母にも家族にも誰に対しても、真に語りえないものであったにちがいない。それ故に彼は書く世界に入らねばならなかったし、われわれは少しでもその理由を知るために彼の創作の森に分け入らねばならぬのである。

ブドリはもちろん等身大の宮沢賢治ではない。しかし、このような意味において「当り前ではない」賢治の分身である。ゆえにブドリは結婚もせず、尋常ではない死を選ぶのである。

二

「グスコブドリの伝記」の初期形である「グスコブドリの伝記」には、主人公の生死に関して次のような異様な言葉を見出すことができる。

私はもう火山の仕事は四十年もして居りましてまあイーハトーヴ一番の火山学者とか何とか云はれて居りますがいつ爆発するかどっちへ爆発するかといふことになるとそんなにはきはき云へないのです。そこでこれからの仕事はあなたは直観で私は学問と経験で、あなたは命をかけて、わたくしは命を大事にして共にこのイーハトーヴのためにはたらくものなのです。」ブドリは喜んで、はね上りました。(六、イーハトーヴ火山局 傍点)

引用者)

初対面の青年に、いきなり命がけで働くことを勧めるペンネン技師も普通ではないし、それを聞いてはね上って喜ぶブドリも通常の理解を越えている。二人はブドリが死ぬべく運命づけられていたことをすでに知っていると考えないかぎり、このやりとりは成立しないのである。さらに「グスコブドリの伝記」では、冷害から人々を救うにはカルボナード火山を爆発させ温度を上昇させる他なく、最後の一人は犠牲にならねばならないことをクーパー大博士から聞くと、「私にそれをやらせて下さい。私はきつとやります。そして私はその大循環の風になるのです。あの青ぞらのごみになるのです」と答えるブドリが描かれている。ブドリにとって死は悲しむべきことでは少しもなく、むしろ喜々として迎えるべきものなのである。これも現テキストでは削除され、トーンは低められてはいるが、このような死への態度に根本的な変化はない。それを異様だとしてしまえば「グスコブドリの伝記」は理解不能なのである。

もちろん、このようなブドリの死への態度が作品内論理で全く理解できないわけではない。ブドリの父や母はわが身を犠牲にして子どもを救ったのだから、その子どもであるブドリが人々のために命を捨てるのは当然だし、苛酷な自然と懸命に戦いながら農業に取組んでいる人々の労苦を肌で知ったブドリが、彼等のために喜んで命を捨てるのも不思議ではない、というふうな。しかし、父や母が命がけで守ってくれた命であればこそ大切にせねばならないと考えるのが普通だし、一回や二回の天災に出会って早々と命を捨てるのではなく、火山技師としての大成を期すのが本当たと考えることも

できる。

要するに、ブドリの二十七歳での犠牲的な死は性急にすぎるのではないか、という思いを読者はぬぐい切れないということである。宮沢賢治という作者に長く親しんで来た者にはよくわかるかも知れないが、一つの独立した作品としてはわかりにくいと言わざるをえない。だから、鳥越信氏の「科学の限界を限界としてきちんと描くことを怠り、ひたすら必然性をもたない自己犠牲へと突っ走ったこの作品は、完全な失敗作と呼ぶほかはない」という全否定の論も、あながち苛酷だとも言えないのである。従ってこの作品を肯定しようとする論も複雑に屈折したものにならざるをえない。

学者としての、すなわち知識人としてのわくを守ろうとする大博士に対して、ブドリはわくにおさまりきれず、脱出する方向へと自らをおし出していった。農民にも知識人もなりきれず、その中間に宙吊りになっている者が、なお意志的に農民に関わろうとすれば、その間隙を埋めるべく、激しく生きる以外なかった。それがブドリの自己犠牲の意味だった。⁽⁵⁾（佐藤通雅）
赤鬚の男もブドリも、己れの夢と祈願に生き、現実には敗残や滅亡の道をたどるとはいえ、自我内面の燃焼を徹底した行動に転じていく人間であったのであり、そこにこそ作品の主題も求められるのではあるまいか。ここに見られるのは現象的事実や科学的真実をもねじ伏せる賢治自身の内面的昂揚であらう。⁽⁶⁾

（土佐 亨）

佐藤氏はブドリを「農民にも知識人にもなり切れず、その中間に宙吊りになっている者」と規定して、それが自己犠牲という激しい

「グスコープドリの伝記」を読む——主人公の死をどう理解するか——

行為を生んだとしている。しかし、この位置づけはむしろ作者賢治自身にふさわしいのではあるまいか。ブドリは沼はたけの主人と別れたあと、「汽車さへまどろこくつてたまらないくらゐ」に思いながら、教えを乞うためにクーボー大博士に会いに行き、博士から火山局の仕事を紹介されると何のためらいもなく応じるのであり、彼に「宙吊りの苦惱」などないのである。さらにブドリの死を理解しがたくさせているのは、火山の爆発は地表の温暖化をもたらすのではなく、逆に冷却化をもたらすという周知の科学的事実である。賢治がこのことを知っていて最後の場面を書いたかどうかは、ブドリの死を論じる上でも大きなポイントになる。土佐氏は賢治が科学者として無理を承知の上で主人公を火山と共に空に散らしたと考え、さらに「妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三」を引いて、「賢治はブドリに喜見菩薩を写しつづ、自己の捨身の供養をも表象した」と述べ、ブドリの死を仏への焼身供養として理解しようとしている。科学者としてよりも宗教者としての賢治に重きを置いた魅力的な読みである。しかし、大塚常樹氏が、S・A・アレニウスの「宇宙の進化」という書物との関連を指摘して以来、この読みは成り立たなくなつたという他はない。

大塚氏によれば「宇宙の進化」は当時の宇宙科学に最新の知見を与えた書物であり、広く読まれたという。そこには、炭酸ガスの量が二倍になれば、地表の温度は四度昇り、四倍となれば温度は八度昇ること、火山は空気中に最も多量の炭酸ガスを供給することが記されている。この説は、クーボー大博士の、カルボナード火山の爆発によって温度が五度上昇するという計算に使われる。また、同書

の、空中放電によるアンモニア化合物や硝酸塩の生成の可能性の指摘は、「七、雲の海」で、雲の中にうす白く光る大きな網がかげられそこに電流が流されると、それは「美しい桃いろや青や紫にパツパと眼もさめるようにかゞやきながら」硝酸アンモニウムを作り、肥料湿りの雨を降らせることに成功するという。科学の勝利を美しく描いた部分に借用されている。大家氏の指摘の正しさは疑うことができないから、賢治はやはり正面から火山の爆発による人々の救済を信じてブドリを死におもむかせたことになる。

こうして考えてくると、「グスコープドリの伝記」は二十七歳の若者が他者のために喜んで死に赴いたことを、真正面から何のてらおもなく書いたものであることを認めざるをえない。それが尋常の理解を越えているとしても、そうだからこそ「伝記」が書かれたのだと作者は反論するにちがいない。それによって「あたり前」の生活を送らざるを得ない者を撃つ、というのではない。賢治にとつてはこのような「超越」こそが人間の条件であつただけである。それは「人間らしさ」という名のもとに「超越」に虚偽を見出そうとする「近代的人間観」とは背反する。しかし、果して「超越」はそれほど賢治にのみ特有の理解しがたいテーマなのだろうか。

三

たとえば、かつて少年少女向けの読みものとして広く愛読されていた一九世紀イタリヤの作家デ・アミーチスの「クオレ」を取り上げてみよう。賢治にも強い影響を与えたと思われるこの作品では、献身や自己犠牲といった超越的なテーマは極めて当然のこととして

平然と登場する。賢治は「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」「ポラーノの広場」「グスコープドリの伝記」を少年小説と呼んでいるが、小学校四年生エンリーコを主人公とするこの物語もそう呼ばれるにふさわしいものである。ここでは「クオレ」（愛の学校）の名の通りに、徹底して弱者への思いやり、寛大な心、献身、自己犠牲による他者の救済が語られる。エンリーコは学校内外の出来事でそれを肌で知るだけでなく、折にふれて父や母からも条理を踏んで注意を受けるし、さらに「毎月のお話」を筆写することによっていやが上にも人間の愛の心の偉大さを知ることになるのである。

作品の中に捜入された「毎月のお話」はストーリーに長短はあるが、それぞれ独立した物語となっており、それだけを取り出して子供たちに聞かせることもできるようになっている。内容を要約して挙げてみる。

十月 「パドヴァの少年愛国者」 祖国イタリヤの悪口を言われ、もらったお金をたたき返した少年。

十一月 「ロンバルディアの少年監視兵」 危険を冒して敵の様子を監視しているうちに、敵弾によって死亡した少年。

十二月 「フィレンツェの少年筆耕」 父のために父に黙って真夜中に手紙の宛名書きの仕事を続け、そのために身体をこわす少年。

一月 「サルデーニヤの少年鼓手」 片足を失ってまで戦場の務めを果たした少年。

二月 「ちゃん(8)の看護人」 父親と間違つて看護した老人を、間違いがわかつたあとも最期まで見取つた少年。

三月 「ロマーニヤの血」 強盗から祖母を救うため命をす
てた、ぐれかかっていた少年。

四月 「市民勲章」 危険をかえりみず溺れた子供を救った少
年。

五月 「アペンニーノ山脈からアンディーズ山脈まで」 行方
不明の母を訪ねて困難な旅をし、病気の母を救った少
年。

六月 「難波船」 船が難波し、二人のうち一人しか助からな
いとわかったとき、少女を救命ボートに乗せた少年。

一番高名なのが「アペンニーノ山脈からアンディーズ山脈まで」
であり、これは「母を訪ねて三千里」という邦訳名でいまでも親しま
れている。「市民勲章」や「難波船」は「銀河鉄道の夜」にも影響
を与えたのではないかと思われる。特に「難波船」の主人公のみな
し子の少年の行為は本当に立派なもので、現代人ならこんな少年が
いるだろうかと疑うこともできる。しかし、「クオレ」という物語
を読み進んで来た者には、この少年の行為は余り違和感なく受け取
めることができるのであって、それほど作者アミーチスの少年たち
への熱烈なメッセージで満たされた作品なのである。

このように「クオレ」に登場する少年たちの姿が「愛」の純粋な
諸形態を示したものとすれば、そしてそれが十九世紀末のイタリ
アの社会的歴史的苦難を前提に成り立つとすれば、同じく多くの問
題を抱えていたわが国の昭和初年に、子供のための雑誌「児童文
学」に発表された「グスコロブドリの伝記」が一つの「愛の物語」
として子供たちに与えられたとしてもおかしくはない。そこに虚偽

「グスコロブドリの伝記」を読む — 主人公の死をどう理解するか —

を感じるのには現代の我々が余りに自己愛にとらわれすぎてしまった
からだとも言えるのである。この視点から言えば、この物語は「あ
りうべかりし賢治の自我像」というよりも、むしろ「ありうべき少
年像」として、当時充分なりアリティを持っていたと言うことも可
能である。思春期を迎え、性の混乱に巻き込まれる前の少年少女が
一種の完成状態の中にあり、この世の真実に敏感に反応する深い精
神性を持ちうることは心理学の見地からも認められている⁽¹⁾。人間の
気高さを語ろうとする「クオレ」や「グスコロブドリの伝記」の理
想主義が、大人ではなく少年少女に向って語られることはそれほど
不自然なことではないのである。

では、「グスコロブドリの伝記」をこのような意味で「ありうべ
き少年像」として読むとすると、どのような特色が浮んでくるだろ
うか。恩田逸夫氏の指摘にあるようにこの物語を一つの教養（成
長）小説として読むとしても、ブドリが通常の学校へはほとんど通
っていないことがまず注目される。十歳になって最初の「寒い夏」
が来るまではブドリも普通に学校に行き、読み書きもできるようにな
ったのだが、次の年の秋、イーハトーヴがついに本場の饑饉に襲
われると、「もうそのころは学校へ来ることもたちもまるで」ない
状態におちいつてしまう。ここでブドリと学校の関係は絶たれてし
まうのであり、以後彼は全くの独学で学問を身につけることにな
る。

ブドリが初めて書物らしい書物を手にするのは、父や母が死に、
妹ネリはさらわれ森の中にとり残されたあと、てぐす工場の手伝い
をすることによってやく命をとりとめ、その冬一人で工場に残された

時である。男たちの置いていったボール紙の箱に入っていた十冊ばかりの本は、てぐすの絵や機械の図がたくさんあるものや、いろんな樹や草の図と名前の書いてあるもの（植物図鑑であろう）などであったが、まるで読めないものがあっても、「ブドリは一生けん命その本のまねをして字を書いたり図をうつしたりしてその冬を暮し」たのである。これが十三歳の少年の、父も母も失い妹もさらわれたあとの一と冬の「勉強」であった。

さらに十五歳の春、世話になっている農民の主人から「おれの死んだ息子の読んだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれを山師だといってわらつたやつらを、あつと云はせるやうな立派なオリザを作る工夫をして呉れ」と言われたブドリは、ひと山の本をもらい仕事のひまに片っぱしから読破する。この読書によつて早速オリザの病気をくいとめることのできたブドリは、いつかこの本を書いたクーボー大博士に直接会つて教えを乞いたいと思うようになる。

十六歳になり農民と別れたブドリはまっすぐにクーボー大博士のところに向う。「早くイーハトーヴの市に着いて、あの親切な本を書いたクーボーといふ人に会ひ、できるなら、働きながら勉強して、みんながあんなにつらい思ひをしなくて済むように作れるよう、また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除く工夫をしたいと思ふと、汽車さへまどろこくつてたまらない」（傍点引用者）気持にかられながら町へ急ぐ。学校では授業のあと試験が行なわれ、ブドリは一回で合格してしまう。そして博士からイーハトーヴ火山局に勤めるよう紹介され、晴れて技師になるのである。

これは一見、ブドリの出世譚のようにも読める。しかし、そうではない。彼がクーボー大博士の試験に一回で合格したのは、その教えを直接受けるまでもなく、内省的なやむにやまれぬ衝動を持った働きながらの勉強によつて、充分な知識と思考力を身につけていることを博士が見抜いたからである。ここには学問のための学問でも、出世のための学問でもない、生きた学問のあるべき姿がはっきりと描かれている。労働者のために学校を開いているクーボー大博士は、生きた学問によつて育つた秀れた人材としてブドリを火山局に推薦したのである。このようなブドリはいわば作者の実践活動の中から生み出された人物である。

しつかりやるんだよ

これからの本当の勉強はねえ

テニスをしてながら商売の先生から

義理で教はることではないんだ

きみのようにさ

吹雪やわづかの仕事のひまで

泣きながら

からだに刻んで行く勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴いて

どこまでこのびるかわからない

それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ

（「「あすこの田はねえ」部分 昭2・7）

これは賢治の開いた稲作指導の講習会に学び、それを実行しようとして苦勞している少年農夫（作品中では「こども」と呼ばれている）

る)をはげます言葉として書かれている。「グスコープドリの伝記」になぞらえれば、クーボー大博士が賢治であり、少年農夫がブドリに当ることになる。ブドリは正に「テニスをしながら商売の先生から義理で」教わったのではなく、「吹雪やわづかの仕事のひまで泣きながらからだに刻んで行く勉強」が「ぐんぐん強い芽を噴いた」典型的な例として、火山局に勤めるに至ったのである。現実の賢治は実践活動に挫折し、この少年農夫のその後は不明である。だが、「本当の勉強」「あたらしい学問」への希望は、この物語の中で熱く語られたのである。

さらにまたここに、「からだに刻んだ勉強」をした者だけが世界を変えようという、学校や学生や「知識人」たちへの静かな批判を説くことも可能であろう。ブドリの早すぎる死に対する批判に対して、「からだに刻んだ勉強」をした事のない者の頭の中だけの批判だ、と賢治は答えるかも知れない。饑饉で両親を失い、苛酷な自然と闘う農民の労苦を肌で知り、その中で現実を打破するために夢中で勉強したブドリが、科学の力で自然の脅威を少しでも支配できる機会に、まるで人柱になるように命を献げたとしても不思議ではない。賢治の学生や「知識人」の空疎な学問に対する批判は詩「丸善階上喫茶室小景」や童話「土神と狐」などに明らかであるが、ブドリの学問が彼等とちがって血の通った生きた学問である以上、みずからの死によってそれが完成することは無上の喜びであったにちがいないのだ。かくして、「グスコープドリの伝記」を、「本当の勉強」「あたらしい学問」への熱い希望の語られた物語として読むことも可能なのである。

「グスコープドリの伝記」を読む——主人公の死をどう理解するか——

四

賢治の作品に親しんでいくと、いくつかの特徴のある表現にくりかえし出会うことになるが、「鉄砲丸のやうに」もその一つである。この表現は本論のテーマである「いかに死すか」にも深くかわると思われる。

(a) チュンセは困つてしばらくもぢもぢしてゐましたが思ひ切つてもう一べん云ひました。「雨雪とつて来てやらうか。」「うん。」ポーセがやつと答えました。チュンセはまるで鉄砲丸のやうに「おもてに飛び出しました。(「手紙 四」)

(b) これらふたつのかけた陶椀に／おまえがたべるあめゆきをとりうとして／わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに／このくらいみぞれのなかに飛びだした(「永訣の朝」)

(c) 「カムパネルラ、僕たち一緒に行かうねえ。」ジョバンニが斯う云ひながらふりかへつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座つてゐた席にもうカムパネルラの形は見えずたぞ黒いびろうどばかりひかつてゐました。ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。(「銀河鉄道の夜」)

(d) 須利耶の奥さまは童子の箸をとつて、魚を小さく砕きながら、(さあおあがり、おいしいよ)と勧められます。童子は母の魚を砕く間、じつとその横顔を見てゐられましたが、俄かに胸が変な工合に迫つて来て気の毒なやうな悲しいやうな何とも堪らなくなりました。くるつと立つて鉄砲玉のやうに外へ走つて出られました。そしてまっ白な雲の一杯に充ちた空に向つて、大

きな声で泣き出しました。(「雁の童子」)

(e)うずのしゅげは光ってまるで踊るやうにふらふらして叫びました。「さよなら、ひばりさん、さよなら、みなさん。お日さん、ありがたうございました。」そして丁度星が砕けて散るときのようにからだがばらばらになって一本づつの銀毛はまっしろに光り、羽虫のやうに北の方へ飛んで行きました。そしてひばりは鉄砲玉のやうに空へとび上って鈍いみじかい歌をほんの一寸歌ったのでした。(「おきなぐさ」)

(a)(b)は妹との死の直前のやりとり、(c)は親友との決定的な別れ、(d)は食卓にならべられた魚を食べねばならぬ苦しみ、(e)はうずのしゅげ(おきなぐさ)の死の瞬間、が取り上げられている。愛する者の死という永遠の別れを前にして、あるいは生きるためには他の生物の死を前提にせねばならぬという宿命におびえ、またどの生物も避けることのできない死を見た者が、その悲しみを表現する唯一の方法として「鉄砲丸(玉)のやうに」馳け出し、飛び上るのである。「生物の根源的な悲しさ」は、そのようにしか表現できない、と詩人は言っているかのようである。この世はそのような悲しみに満ちているから、鉄砲玉のような速度で駆け抜けなければ生きていけない、と言っているかのようでもある。

「グスコブドリの伝記」に「鉄砲玉のやうに」という直接の表現はないけれども、ブドリの一生を、饑饉による父母の死という悲しみを号砲として、鉄砲玉のやうに駆けぬけたものと規定することは許されるだろう。火山の噴火と共に空に散ったブドリに、おきなぐさの時のやうにひばりの歌が献げられてもいいのである。それが

感傷的でありすぎるとしても、ブドリが地上での定住を許されぬ「走り出る者」であつたことはまちがいない。

イーハトーヴが饑饉にみまわれた時、まずお父さんが、ついでお母さんが「よろよろ家を出て」行く。せめて子供たちだけに食物を残してやるためである。二人は泣きながらあとを追って行くのだが、ついに両親は帰って来ない。二十日ばかり後、妹ネリが人さらいにさらわれる。ブドリは泣き叫びながら追いかけるが、見失い、一人で森に取り残される。てぐす銅いの男たちに救われたブドリは、その手伝いをして生き延びるが、火山の噴火で工場は閉鎖となり、ブドリもまた「みんなの足痕のついた白い灰をふんで野原の方へ出て行」くことになる。そこで沼ぼたけの農民と知り合い世話になったブドリは、六年間懸命に働くが自然には勝てず思うような成果を上げられない。農民と別れたブドリはクーボー大博士に教えを乞うことで自然災害を克服したいと考えイーハトーヴ市に急ぐ。クーボー大博士にも会え、その紹介で火山局の技師となつたあと四年の間に肥料を降らせるほどの技術も修得し、妹ネリにも再会する。それから五年間は楽しい日々を送るが、二十七歳の時、「寒い夏」を防ぐべく「私のやうなもの、これから沢山できます。私よりもっともつと何でもできる人が、私よりもっと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから」という言葉を残して、この世を去つていくのである。

これが「走り出る者」としてのブドリの一生であつた。(a)(b)では愛する者の死を前にすすべを失つた者が、唯一できる行為として半ば衝動的に「鉄砲丸のやうに」外へ飛び出すのだが、自分のため

に死んだ父母の愛を知っているブドリは、「あめゆき」ではなく人々に幸福をもたらすために、地上のどこにも安住せず、この世の外にまで飛び出して行くのである。

当然のことながら、このような視点から見たブドリは作者賢治に極めて近い存在である。弟清六氏の「前生から持って生まれた旅僧のようなどころがあった」という言葉¹³に的確に示されているように、彼は地上的価値から出て行きつづけることによって一生を終ったと言ふこともできる。地方の名士、富豪たる宮沢家からも、父によつて教えられた浄土真宗の教義からも、いろんな意味で彼自身に最もふさわしいと思われた教師からも、自分を詩人と考えること¹⁴からすらも、彼は出ていったのである。社会の中に安定した位置を占めることになれることのできなかつた賢治は、ひそかに自分が人間ではなく雁の化身であると考えたり（「雁の童子」、墮ちた天人であると考へたりした（「堅い璽路はまっすぐに下に垂れます」）。地上は仮の宿りであり、真のすみかは天上であった。こう考へることができるとすれば、死は少しも苦しみではなく、むしろ喜びである。ブドリの淡々とした死へおもむく姿はやはりこのような作者の生を視野に入れなければ理解できない。「大循環の風」や「青ざらごみ」になることは、ふるさとに帰ることなのだから、ブドリは作者にかわつて喜んで帰還するのである。

このように作者と主人公を重ねてみるとすれば、ブドリの死が二十七歳であることにも意味を見出すことができるだろう。すでに見たように、物語の記述に基づいて数えれるとブドリの死が二十九歳でなければならぬとすれば、賢治が二十七という数にあることだわり

「グスコブドリの伝記」を読む — 主人公の死をどう理解するか —

を持つていたことを疑うことも可能なのである。むかしふう¹⁵に数え年¹⁶で数えれると作者賢治の二十七歳は大正十一年であり、この年の十一月に妹トシが死亡している。それはブドリの死んだ年齢と一致する。このことについて、たなか・たつひこ氏は、賢治は妹トシの死に際して無力だった自己を悔恨し、もしも一度生き直せるならトシの幸せのために命を捨ててもかまわないと考へ、妹を含めたせんたいの人々の幸福のために死ぬブドリを描いたと指摘している¹⁷。あるいはもつと単純に、賢治はトシと共に二十七歳で本当はこの世を去りたかつたのだ、と考へることもできる。「他者のため」という重々しいよろい¹⁸はみせかけであつて、死に向つて急ぐブドリ、死を喜ぶブドリこそ作者の姿なのだ¹⁹と考へてみることも興味深いことなのである。

それがうがつた見方であるとしても、トシの臨終での言葉「うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあようまれてくる」（「永訣の朝」）が、この物語を一貫して流れていることを感受することはできるだろう。兄と同じく法華経信者となりながら、病いのために献身することもできぬまま死んでいくとする無念がこの言葉に込められているとすれば、賢治がトシにかわつて「わりやのごとばかりで」苦しむのでなく「ひとのごと」に心を砕き、命を捨てるブドリを描いたと考へることは、「自己犠牲」という重苦しい行為に暖い血を注ぎ込めることを可能にするように思われる。

このように賢治が死を夢見ていたとしても、それは単なる現実逃避ではないことを再確認しておこう。賢治のような宗教的人間にあっては聖なる絶対性こそが渴望されるのであり、果てしない相対的混乱の連続である現実を忌避されざるをえないか、逆に過度に激しく生きられざるをえない。それが賢治が「何とも言えないほど哀しいものを内に持っていた」^(註)大きな理由であった。おそらく、この一点で作者とブドリは最も深くつながることになる。なぜなら、ブドリは賢治のような宗教的人間であるとは思えないが、「聖なる絶対性」を生きた記憶をはっきりと持っているからである。

グスコブドリは、イーハトーブの大きな森のなかに生れられた。お父さんは、グスコブナドリといふ名高い木樵^{きせう}りで、どんな巨きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるやうに訳なく伐つてしまふ人でした。

ブドリにはネリといふ妹があつて、二人は毎日森で遊びました。ごつごつしとお父さんの樹を鋸^{のこ}音がやつと聴えるくらゐな遠くへも行きました。二人はそこで木苺^{きいちご}の実をとつて湧水に漬けたり、空を向いてかはるがはる山鳩^{やまばと}の啼くまねをしたりしました。するとあちらでもこちらでも、ぼう、ぼう、と鳥が睡^{ねむ}さうに鳴き出すのです。 (一、森)

冒頭の部分である。全部を引用できないのが残念なほど、ここには幼児にとつての聖なる空間と時間が美しく描かれている。

偉大な父の庇護のもとで森の中の遊びに没頭する兄妹。この構図

だけでもう完全である。兄妹といへば賢治と妹トシのことを連想し、そこに恋愛感情をかき出そうとする論を想起することになるが、そういう論はおそらく根本的な誤りを犯している。なぜなら兄と妹という血縁の強き自然さにくらべ、男女という関係は同じ原初的な一対であってもはるかにあやうい相対的しかもちえないからである。二人の、木苺の実を泉に漬けたり、山鳩の啼きまねをしたり、ブリキ罐で蘭の花を煮たり、白樺の木に「カツコウドリ、トホルベカラズ」と書いたりする行為は、あらゆる恋愛のしぐさや、結婚生活での諸行為に勝っている。そこにはイメージと実体との幸福な一致があり、そのずれによる相対的な現実の露呈はどこにもないのであるから。

ブドリが十歳、ネリが七歳になるまでこのような聖なる絶対性は崩れることはなかった。その至福の中で育つたブドリは以後この聖なる絶対性を破壊した自然と戦い、それを回復させるために自分の人生を献げたと言ふことができる。どんな巨きな木でも赤ん坊を寝かしつけるやうにわけなく伐つてしまふ父。しかし、農民はそうはいかない。あの「山師はる」農民のあがきが自然の圧倒的な力に左右される農業のむつかしさを示している。何とかして木を伐るやうにオリザを作ることはできないか。もしその方法がみつければ、地上はどこも「イーハトーブの森」のようになるはずである。ブドリを駆け抜けるやうに生きさせたのはこのような自問であつたらう。

ブドリは命をかけて答えを出す。「ちやうど、このお話のはじまりのやうになる筈^{はず}の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖いたべものと、明

るい薪たきぎで楽しく暮すことができた」のである。

この時、ブドリはちょうどあのおきなくさのような、植物の如き死を死んだということができる。一般の植物は両性具有であることよって死が死に終らず生に反転する。しかし雌雄が別である動物や人間は植物のようには多量の生を準備できない。ブドリの父や母が救いえたのは二人の子供だけであった。それよって命ながらえたブドリが妹のように結婚しなかったのは、それでは「イーハトーブの森」を再現できないからである。ブドリが死ぬ時「さよなら、ひばりさん、さよならみなさん。お日さん、ありがとうございまして。」と言ったかどうかはわからない。しかし、「丁度星が砕けて散るときのようにからだがばらばらにな」ったことは明らかであり、そのあとに、たくさんのブドリやネリたちが、ちよと散らばった種子のように生命を与えられたのである。

註

- (1) 田口昭典氏の指摘がある。「賢治童話の生と死」 洋々社 昭62・3
- (2) 小沢俊郎「賢治童話事典 グスコープドリの伝記」 「宮沢賢治必携」所収 學燈社 昭55・5
- (3) 栗原敦「グスコープドリの伝記」 「国文学」昭61・5 臨時増刊「賢治童話の手帖」所収 學燈社
- (4) 鳥越信「グスコープドリの伝記」 「解釈と鑑賞」昭48・12 号所収 至文堂
- (5) 佐藤通雅「宮沢賢治の文学世界―短歌と童話」 泰流社 昭「グスコープドリの伝記」を読む―主人公の死をどう理解するか―

54・11

- (6) 土佐亨「グスコープドリの伝記」私見」 『作品論宮沢賢治』所収 双文社出版 昭59・7
- (7) 大塚常樹「賢治の宇宙論―銀河をめぐる―」 「宮沢賢治」第4号所収 洋々社 昭59・5
- (8) 矢崎源九郎訳角川文庫版による。 昭32・4初版
- (9) 「風の又三郎」では、物語が新学期(休み明け)から始まり、月、日、曜日の学校日誌形式をとっていることに影響をみることが出来る。「銀河鉄道の夜」では、優等生デロッシにこれが、いつもそばにいたいと思う「ぼく」(エンリーコ)にカンパネラとジョバンニが重なるし、父親が六年間刑務所に入っていた少年や、いじめられる炭屋の少年、病気の母を持ち、家のために懸命に働く少年、等呼応する題材が多い。また、「ラッコの上着」ならぬ「ラッコの帽子」も登場する。「銀河鉄道の夜」との呼応についてはすでに「別冊太陽 宮沢賢治銀河鉄道の夜」(平凡社 昭60・6)に指摘がある。
- (10) 矢崎源九郎「クオレ」あとがき参照 角川文庫「クオレ」上巻
- (11) 河合隼雄氏は、子供は思春期の直前十二、三歳で精神的に一応の完成をみるとしている。「明恵 夢を生きる」参照 京都松栢社 昭62・4
- (12) 恩田逸夫「ブドリのことなど」 校本全集十巻月報所収
- (13) 宮沢清六「兄賢治の生涯」 「宮澤賢治全集」別巻「宮澤賢治研究」所収 筑摩書房 昭44・8

- (14) 「あのころわたくしは芸術へ一種の偏見をもつてゐまして自分でも変なものを書きながら詩の雑誌をこさえたり議論したりすることを大へん軽べつして居りました」 日付不明草野心平あて書簡下書
- (15) たなか・たつひこ「二十七歳考——グスコープドリの死と賢治」 『四次元』第110号 昭34・11
- (16) (15)に同じ。
- (17) このことについてはすでに見田宗介氏の指摘がある。「宮沢賢治」 岩波書店 昭59・2